



TITLE:

## 第10回岐阜外科集談会抄録

AUTHOR(S):

---

CITATION:

第10回岐阜外科集談会抄録. 日本外科宝函 1961, 30(2): 425-427

ISSUE DATE:

1961-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207207>

RIGHT:

## 第10回岐阜外科集談会抄録

昭和35年11月9日 於 岐阜医大附属病院

### (1) 腔に浸潤穿孔した膀胱癌の1例

岐阜医大 泌尿器科 尾関 信彦

55才の主婦。10年前より右卵巢囊腫を指摘されている。昨年12月より排尿困難の傾向ありたるも2週間前突然肉眼的血尿に気付き以後持続している。又昨年夏頃より時々不正性器出血を訴えている。現症、体格中等度、栄養稍々不良、腹部で右側に小児頭大の腫瘤を触れ、表面平滑、弾性軟、無痛性で可動性あり。外陰部異常なし。腔指診で前壁中央部に母指頭大の腫瘤をふれ、硬く表面不規則である。導尿するにネラトン8号挿入可能であるが、残尿500ccを認めた。膀胱鏡検査で膀胱鏡は強く上方に向い内尿道口より出血す。膀胱粘膜正常、尿は血膿尿であつた。腹部正中切開にて左右卵巢囊腫を屠出し、両腸骨リンパ節を清掃し、膀胱頸部と尿道は腔前壁を一塊として剔出し、腹部膀胱瘻を設置し、腔壁は残存部を縫合した。剔出標本の組織学的検査で尿道粘膜は正常であり、尿道は腫瘍とは無関係で膀胱頸部に原発せる乳頭状移行上皮癌が腔に連続的浸潤を来し、一部前腔壁に穿孔したものである事が判明した。

### (2) 睪丸回転症の1例

県立岐阜病院 外科 岡本 忠雄  
皮泌尿科 石山 勝蔵

52才の会務員。既往症、家族歴に特記すべきものなし。起床時左鼠径部にグリグリした隆起物あり。1時間半後椅子に腰かけた所急に腰から下腹にかけて激痛あり。嘔気、嘔吐なし。外鼠径輪の部に母指頭大の丸い隆起あり、圧痛強し、嵌頓ヘルニアの疑で発病6時間後に手術を行った。

精索は睪丸より約3cmの部位で時計の針と反対方向に360°回転して居り、睪丸の發育は略々正常であつたが、副睪丸の發育は極めて不良で恰も睪丸から直接に精管に移行している様にみえ、而もハンター氏導帯は全く認められない。回転を戻してしばらく観察していたが血行恢復の徴を全く認めなかつたので除睪術を施行した。経過順調。文献的考察を行った。

### (3) イレウスに関する統計的観察

岐阜市民病院外科 島田 脩・米谷 渌・  
安江 幸洋

我々は最近5年間に一次イレウス24例、術後イレウス32例、計56例の急性イレウスを経験した。男性は33例、女性は23例。イレウスの種類は癒着及び索状物によるものが60.7%、捻転17.9%、腫瘍8.9%、腸重積7.1%である。年齢は20~50才迄が最も多く60%を占めている。治療成績は一次イレウスでは8.3%、術後イレウスでは21.9%の死亡率である。術後イレウスの原疾患は虫垂炎によるものが28.1%、胃十二指腸疾患25%、婦人科疾患18.8%、イレウス15.6%である。前の手術からの期間は10日以内が25%、1年以内のものの総計は65.6%である。

### (4) 最近4年間の教室胆石症手術の遠隔成績

岐阜医大 第2外科 国枝 篤郎

胆石症の外科的治療に際して、Postcholecystectomy syndrome として取扱われる障害が論議されているので、最近4年間に教室で手術した39例にアンケートを出し、これを中心に遠隔成績について検討した。アンケートは症状を列挙し自己の愁訴に○印をつける方法をとつた。34例(87%)の解答を得た。その結果死亡例1、再発及び不冶例6、不完全治癒13、完全治癒例14であり、全身倦怠、腹部不快感などの愁訴が多く、次に下痢、便秘がつぎ、黄疸発熱痙攣発作は少なかった。

これを結石存在場所別にわけて見ると総胆管結石は術後障害多く、特に肝内胆管結石は障害が多いようであつた。又無結石胆嚢症も術後の愁訴は胆嚢結石症に比べると多い様であつた。

### (5) 長期生存せる動脈管開存症の治験例

国立療養所 岐阜日野荘 時光 直樹

38才の女、幼時より先天性心疾患を指摘されていたが、自覚症状なく、普通生活を行つていた。しかしながら、本年7月頃より過労時に心悸亢進、顔面及び手背に浮腫を来すようになり、本年9月30日当荘に入所す。

第Ⅱ肋間胸骨左縁で持続性機械様雑音を聴診並び心音図にて認める。レ線像で心陰影の左第ⅡⅢⅣ弓の突出を認め、肺門ダンスを証明する。その他 Gaets's sign 及び心カテーテル検査で動脈管開存症と診断し、

本年10月3日開胸。診断を確認すると共に動脈管結紮を行なう。その後、心雑音、自覚症状は消失し、現在経過良好である。

本症例は長期生存し得た原因について考案を加えた。

#### (6) 幼児の縦隔血管腫の1例

岐阜医大第二外科 斎藤 晃

縦隔に発生する血管腫は稀有なものであつて、本邦では数例の報告を数えるにすぎない。胸部外科の発達と共に縦隔腫瘍の手術症例も増加し、本腫瘍に関する知見も増加するであろうが、ここに最近経験した幼児の縦隔血管腫1例の報告を行った。

患児は生後6ヵ月の女児。2週間前よりの次第に増強する呼吸困難を主訴として入院。前縦隔の右上部より鎖骨上に突出せるほぼ手拳大の腫瘍を発見し、手術的に全剔出して治癒せしめ得た。腫瘍は嚢腫性血管腫であつた。

この様な腫瘍にレ線照射を行つてある程度有効であつた報告例もあるが、本症例では術前のレ線治療は全く無効であつた。

#### (7) 先天性十二指腸狭窄症2例

岐阜医大 第2外科 国枝篤郎・渡辺 尚

先天性十二指腸狭窄症は諸種小児消化器の畸形中、稀れなものとされているが、我々は本症2例を経験し、手術を行つた。1例は生後35日目の男児で、生後間もなくより嘔吐を始め、次第にその回数が多くなつた症例で、手術は十二指腸空腸吻合を行つたが術後6日目に死亡した。更にもう1例は生後20日目の女児で、これも亦生後間もなくより嘔吐する様になり、手術で胃空腸吻合術を施行し術後経過良好である。尚2例共 Treitz 氏帯の位置異常及び総腸間膜症を合併していた。

第1例は死亡し、第2例は手術成功例であるが、その発音程度及び狭窄程度にも関係しようが、本症が外科的手術以外方法がない点、早期発見、早期手術を行えば、更に手術成功率は向上する様に思える。

#### (8) 口腔底に生じた類表皮嚢腫の1例

岐阜医大 第1外科 松波 英一

35才女子の口腔底に生じた類表皮嚢腫に口腔内面及び左顎下部皮膚面より切開を加へ完全に剔出し全治せしめた。嚢腫は顎舌骨筋及び顎舌骨筋の間ではほぼ正中線上に位置し大さは9×5cm内面は単房性で黄灰白色粥状物質で充満し毛髪、歯牙を全く認めなかつた。組

織学的には重層扁平上皮が嚢腫の内面を被ひ外層は結合組織が存在し、皮脂腺、汗腺等、皮膚付属器を全く認めなかつた。

#### (9) 潰瘍性大腸炎、ポリボージスに於ける回腸膀胱瘻の1例

岐阜医大 第1外科 神本 敏治

33才の女子。主婦。5年前虫垂切除術、2ヵ月前 Enterocolitis、及び回盲部癒着障害で3週間入院、6週間前、腎盂炎、膀胱炎で治療を受けた患者で、3週間前より、下腹部痛、尿濁濁を主訴として来院した。

腸膀胱瘻の診断で開腹術を施行した。膀胱側の瘻孔は一次的に閉鎖し、回腸及び結腸右半切除術を行つた。経過はきわめて順調で、30日目に全治退院した。

手術所見、組織所見より、ポリボージス、潰瘍性腸炎が周囲組織特に回腸が膀胱に癒着して、ここに瘻孔を形成したと思われる症例を経験した。

#### (10) 胃切除後胃腸吻合部の潰瘍形成

岐阜医大第1外科 庄瀬 光男

26才、男：1年6ヵ月前、胃潰瘍の診断のもとに Billroth 第1法にて約2/3胃切除術を行ない、絹糸を用いて胃十二指腸吻合を行なつた。術後経過良好であつたが、8ヵ月前左側腹部を強打し、以後吐血など潰瘍様症状を再びきたし、胃液、胃レ線透視及びガストロカメラなどの諸検査を行ない、胃からの出血であることを確認し、術後消化性潰瘍の疑いのもとに再手術を行なつた。胃縦切開を加えて調べるに残胃小彎側吻合部附近に絹糸を中心とした潰瘍あり、絹糸は約4cm内腔に懸垂して、絹糸による牽引性出血であることを認めた。又この近くに縫合糸膿瘍あり、約3ccの膿排出があつた。

これらの潰瘍、膿瘍を含めて Billroth 第2法にて胃切除を加え、Cut Gut を使用して再吻合を行ない、術後経過良好にして16日目全治退院した。

#### (11) 虫垂欠除症症例

美濃病院外科 徳田 稔・遠渡正夫

先天性虫垂欠除症は、昭和13年本邦第一例が岩川により報告されたが、其の後の追加症例は稀であるので、最近得た自験例を報告する。

患者は40才女子で、約2ヵ月前より時々軽度右下腹部痛を生じ、某婦人科医により、子宮附件炎の診断を受け治療された。以後腹痛再発を繰返し来院した。来院時、廻盲部圧痛、白血球数7000、で腹壁緊張なく、慢性虫垂炎の診断のもとに手術を行つた。手術所

見は、盲腸が移動性に富む外、炎症性変化なく盲腸末端は盲嚢となり、この部に直径約2mm円形の漿膜欠除部分を認めたが、腹膜に埋没された痕跡なく、遊離虫

垂も発見し得なかつた。以上より炎症、退縮による虫垂欠除でなく、先天的欠除と考える。